



ムカサリ絵馬は「山寺」の名で知られる山形市の立石寺など、山形県村山地方の寺に多くみられる風習。縁結びで知られる若松寺では江戸時代に始まったとされ、絵馬の数は千数百に上る。絵馬師に描いてもらう遺族も多い。戦後は戦死した息子の供養のために奉納されたものもある。似た風習は、青森県津軽地方にもあり、霊場の堂内に、遺影とともに衣類など死者への供物やガラスケー入りの花嫁人形などが並ぶ。(伊東大治)

へめためでのたの若松様よ、花笠音頭であつたわね山形県天童市の若松寺に不思議な絵馬があると聞き、訪ねた。本坊の扉を開くも、絵馬らしきものなど見当たらない。代わりに結婚式の様子が描かれた額絵が壁一面に飾られている。お祝いの席だというのに、どれも切なさを感じさせる絵だ。「死者の結婚式なんだよ」とお寺の方が教えてくれた。これこそが「ムカサリ絵馬」だったのだ。「ムカサリ」とは山形県村山地方の方言で、結婚式という意味。大事に育てた娘が結婚し、「向こうへ去る」に由来するといふ。

結婚を知らずに死んだ我が子に「せめて天国で結婚式を挙げさせてやりたい」。そんな親の思いが込められた絵はタッチも様々だ。戦前は日本画的なものが多く、戦後は軍服姿の男性とウエディングドレス姿の女性のツーショットも見受けられる。幼子の顔写真や大人の身体に貼り付けた合成写真もあった。近い将来、「額型液晶パネル」に3D映像のムカサリ絵馬が登場するかもしれない。

不謹慎に聞こえるかもしれないが、肝心なのは亡き子を思う親心だろう。その芯がぶれなかつたからこそ、この風習は現代にも思いついているのだ。その証

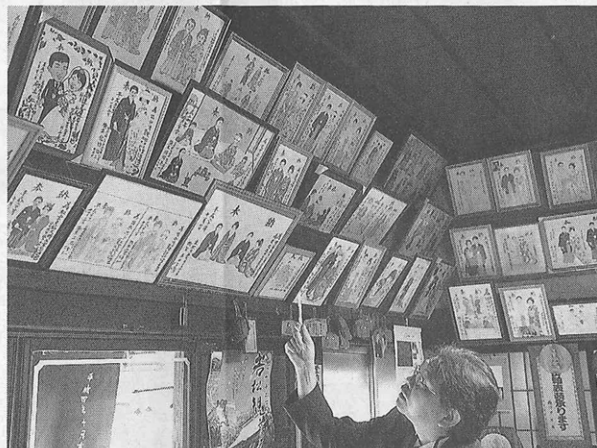
第8号「ムカサリ絵馬」 野村浩志(山形鉄道社長)

「天国で結婚式を」切ない親心

拠に最近北海道から九州まで、全国から奉納の申し込みが増えているといふ。絵は奉納者が描くのが基本だ。タッチや上手が下手かなどは問われない。しかし、一つだけ優しはならないルールがある。それは、結婚相手として実在する人物は絶対に描いてはならない。のむら・ひろし 1968年、埼玉県越谷市生まれ。全国の鉄道を乗り歩く「鉄ちゃん」で、山形鉄道の公葬社長。

実は近々、ある地元の結婚式に招待されている。うち(つら)ワ「長井線」の鉄道車内で式を挙げる珍しいプライベートイベントだ。一瞬、「むかさり列車」と名付けようかとも思っただけ、ちょっと切なさを感じてしまふのは私だけであらうか。

勝手に
東北世界遺産



若松寺の本坊に安置されているムカサリ絵馬。県外から奉納に来る人もいる＝山形県天童市山元